（実践報告）

比較聴取を取り入れた歌唱授業の実践

～生徒自身が演奏の変化に気付く音楽科学習を目指して～

篠原昂太（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）
三上次郎　田中秀明　西田治（長崎大学教育学研究科）

１．研究の背景

本研究は、中学校音楽科における歌唱の活動において、生徒が成就感を得ることのできる授業を目指し着想した。

本研究のテーマを設定した具体的な理由は２つある。一つ目は、大学院一年次に、実習で歌唱の授業を行った際、「歌いながら聴くことは難しい」ということが分かったからである。授業の中で、指揮者の生徒が「みんなにもハーモニーを感じてほしい」と言った言葉を皮切りに、学級を聴くだけの人と歌うだけの人に分けて活動を行った。すると、聴くだけの活動に取り組んだ生徒は歌っている時には気付かなかったことに気付くことができた。これは、生徒が自分たちの歌声を歌いながら客観的に聴くことの難しさを示唆している。このことから、歌う活動だけに取り組んでいるうちは、生徒は自分たちの演奏を客観的に聴くことができず、演奏が良くなったかどうかを判断することが難しいのではないかと考えた。

二つ目は、「教師主導型の授業」では音楽そのものは確かに良くなるけれど、生徒自身が自らの演奏の課題を把握しながら活動しているのか疑問に感じたからである。

例えば、歌唱の授業では、教師は授業中、常に前で生徒の演奏を聴いている。そのため、生徒たちの歌を客観的に捉えることができる。そこから、「今、何が問題なのか」というような課題や「どうしたら改善するか」といった課題の解決方法を考えることができる。一方、生徒は教師から課題を投げかけられても、自分たちは歌うことに必死で「なぜ変えないといけないのか」というように課題を自分ごととして認識していないことが考えられる。これらのことから、教師と生徒には課題を認識する際に、ズレが生じている可能性がある。

これらのことから、生徒は自分たちの演奏を客観的に聴く機会がない限り、課題を自分のこととして把握していなかったり、課題が解決したとしても実感が伴わなかったりする可能性が考えられる。また、客観的に聴くだけでは、授業で変化させたいねらいが明確にならず、自分たちの演奏がよくなったかどうかに気付くことも難しい。本研究では変化させる授業のねらいを明らかにし、そのねらいが達成できたかに気付くための手立てとして比較聴取を位置付けた。

２．研究の目的と仮説

本研究の目的は比較聴取を取り入れた授業によって、授業のねらいを明らかにしたり、生徒が自分たちの演奏の変化に気付いたりすることができるか明らかにすることである。背景及び目的から本研究の仮説を「比較聴取を取り入れた授業によって（1）授業のねらいを明らかにしたり、(2) 生徒が自分たちの演奏の変化に気付いたりすることができるのではないか」と設定した。

３．先行研究

比較聴取についての先行研究はあまり数は多くない。ジェームス・マーセルは比較聴取の必要性について、「物事は、比較によって明らかになる場合が多い。たとえば、同じタイプの音楽、対照的な音楽、程度のちがった音楽、同一作品についての異なった解釈などを比較してみると、音楽の実態がより明らかになる」[マーセル：1971, p. 217] と述べている。

また、比較聴取の機能について、衛藤晶子・小島律子は「ある点で共通性を持ちながらもある点では異なる面を見せる複数の音楽を提示し、対比的にその違いを目立たせて知覚・感受させる方法ということができる」[衛藤・小島：2006, pp. 29-41] と述べている。

その他の先行研究には、日吉武・山﨑浩隆（2012）や山﨑浩隆（2014）がある。衛藤・小島（2006）と合わせても、比較聴取に関する研究はまだ多いとはいえない。また、いずれの研究も小学校教育での実践であり、中学校教育での事例は見当たらない。さらに、比較聴取という活動の形態から、鑑賞に依存する部分が多く、表現の分野では、その有効性や機能について、多くのことが明らかになっていない。

４．検証授業

（１）検証授業の概要

検証実践は、平成 27 年 7 月 6 日（火）に長崎市立の公立中学校で行った。学年は第三学年で、大地讃頌を教材に用いた。題材は「混声四部合唱の豊かさや良さを感じよう」である。

本教材は、生徒にとって初めての混声四部合唱である。また、実践の中で自分たちの演奏を聴く活動を取り入れているが、生徒たちは自分たちの演奏を聴くことは初めてである。

本実践は題材六時間構成の第二時間目である。第一時間目は模範演奏の CD を聴いて、自分のパートの音を把握する活動に取り組んでいる。本時は、「なんとなく歌っている自分のパートの旋律を正しい音程で歌えるようになること」をねらいとした。

（２）検証の方法

①ねらいを明らかにするための比較聴取について

ねらいを明らかにする比較聴取とは、授業の前半に行う比較聴取である。その目的は、演奏の何を変化させるのか、生徒と教師、学級内で共有するためである。また、授業の後半に行う比較聴取で演奏のどの部分が変化しているのか気付かせるためのものでもある。

実践では、教師が２通りの演奏を歌い、聴き比べをさせた。これは本時のねらいが旋律の音程にあるということを捉えさせるために行ったものであるため、教師の演奏は音色や強弱、テンポは変えず、旋律の音程の一部分だけを変化させた。

データは授業の終末で行う振り返りシートを用い、比較聴取によってねらいが明らかになったかを問い、４件法で回答させたものを分析した。

②演奏の変化に気付くための比較聴取について

演奏の変化に気付くための比較聴取とは、授業の後半に行う比較聴取である。その目的は、活動によって演奏が変化したこと、自分たちの演奏が成長したことに気付くためである。

実践では、授業の最初と最後に学習する部分を録音しておき、授業の終末でその録音を聴き比べさせた。

データは授業の終末で行う振り返りシートを用い、前後の録音を聴き比べて変化していることに気付いたか問い、４件法で回答させたものを分析した。

（３）授業の流れ

授業は、初めに、前時の振り返りとして合唱を行った。その際、教師は最後の聴き比べで変化を感じさせるための録音を行い、次に、一度自分たちの演奏を聴き、ねらいを設定するために、教師の範唱による比較聴取を行った。そして、ねらいを達成するためのパート練習に取り組ませ、再度合唱し、録音を行った。最後に授業の最初と最後の録音を聴き比べ、振り返りを行い、授業を終了した。

［全体合唱の場面］

5　展　　開

過程	生徒の活動	教師の手立て・評価	時
気付く／見通しをもつ／解決する／生かす／振り返る	1　「大地讃頌」の「ははなる」から「感謝せよ」までを合唱し、課題を見つける。	1　・大地讃頌を合唱させ、録音をする。 ・録音したものを聴かせ、音程に対する課題意識を持たせる。	5
	2　ワークシートに記入する。正しくない箇所を指摘する。	2　・「夢の世界へ」のワンフレーズを教師が３通りの演奏をする。 ・正しい音程と間違った音程の聴き比べをさせる ・「音程シート」を示す。 【課題を明確にするための比較聴取】	10
	3　音程シートを用いて、「ははなる」から「感謝せよ」までパートで練習をする。	3　・活動の前に、音程シートの使い方を説明する。 ・各パートに教師が入り、難しい箇所に印をつけさせたり、聴くだけや小声で歌うなどの活動をさせたりすることで、正しい音程を捉えさせる。 《評価》 音程シートを使って、自分の旋律を正しい音程で歌うことができる。技	20
	4　音程シートを用いて、「ははなる」から「感謝せよ」まで合唱をする。	4　一回合唱した後、正しい音程で歌える生徒を各パートから一人ずつ選び、４人で合唱をさせる。 最後に全体合唱を録音する。	5
	5　本時の最初と最後の全体合唱の演奏を聴き比べる。	5　最初と最後の演奏を聴き比べさせる。正しい音程で演奏できるようになったことに気付かせる。 【自己の変化に気付くための比較聴取】	5
	6　本時の振り返りをする。	6　振り返りシートにめあてを意識して取組めたか、めあてを達成できたか、演奏がどのように変化したかの気付きを記入させる。	5

［学習指導案の展開］

（４）ねらいを明らかにするための比較聴取について

「夢の世界を」の１フレーズを用い、音程の正しい旋律と間違っている旋律の２通りを聴き比べさせ、違いを捉えさせた。最初に聴き比べをさせた時、生徒は何が変わっているのかわからなかった。しかし、繰り返し聴き比べさせることで、音程が違う部分があることに気付いた。そこで、歌詞のどの部分が違っているのか聴き比べをさせた後、答え合わせを行った。その際、違いが明らかに分かるように可視化の手立てとして音程シートを用いた。最後に、微妙な音程の違いも間違えであると認識した生徒たちは、普段自分たちが歌っている時はなんとなくでしか歌っていないことに気付いた。そこで、本時のねらいである「正しい音程で歌えるようになる」を設定した。

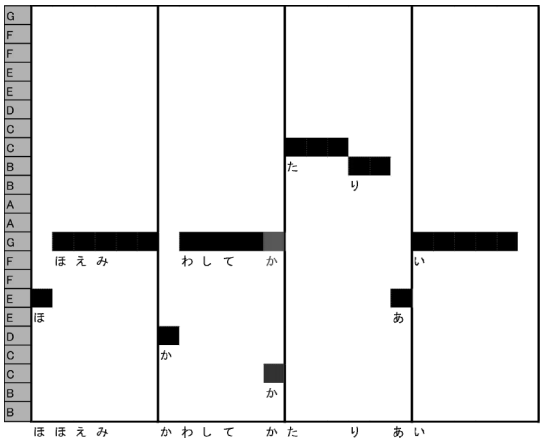
［教師の範唱による比較聴取の場面］

（５）答え合わせの際に用いた音程シートについて

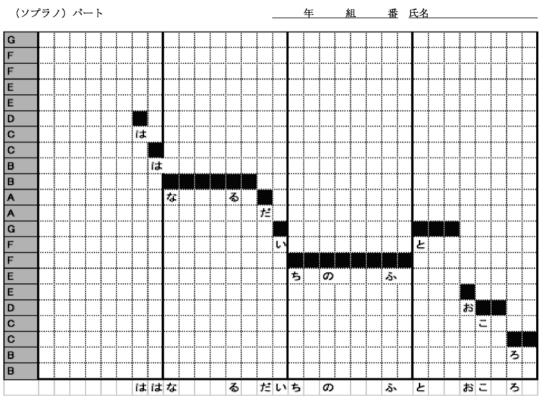
音程シート［図表１］は音の高低や長さを視覚的に捉えるためのものである。実践では、音の違いを明確に認識させるために、答え合わせの際に用いている。表は、縦軸が音高を、横軸が音価を示している。そのため、マス目は、縦軸が１つにつき半音を表しており、横軸が８分音符を表している。よって、旋律の開始音はホ音であり、調はハ長調となり、拍子は８分の６拍子である。

比較聴取では、赤色で示している「かたりあい」の「か」の部分を変化させた。正解は黒で示してあるように前の音と同じ音である。間違えは青で示しており、本来の音より低く歌っている。

生徒は、答え合わせの際、この表を指で追うことで、音程の微妙な変化に気付くことができ、音程の正確さを感じとっていた。



［図表１］



［図表２］

（６）課題を解決するためのパート練習について

めあてを「正しい音程で歌えるようになる」と設定した後、20 分程度パート練習に取り組ませた。その際、ねらいを明らかにするための比較聴取で用いた音程シートを活用させた［**図表２**］。教師は各パートを回り、特に音が取りにくい部分を指導した。生徒は指で音を追ったり、難しいところに印をつけたりして取り組んでいた。

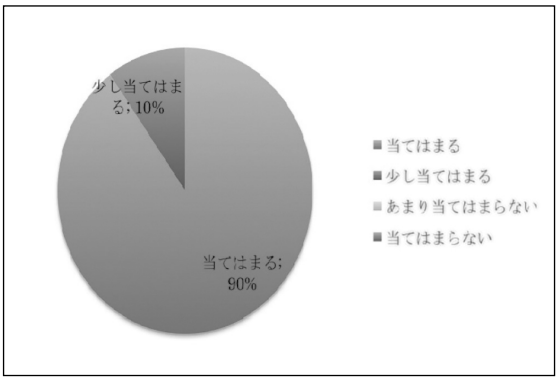
［課題を解決するためのパート練習の場面］

（７）演奏の変化に気付くための比較聴取について

授業で取り組んだ大地讃頌の前半部分を用いた。演奏は授業の最初の録音と最後の録音である。生徒は聴き比べの際、真剣な表情で自分たちの演奏と向き合っていた。また、演奏の変化が特に感じられる箇所では、お互いに顔を見合うなど、成長を共有している様子が見受けられた。実践では、一度の聴取が約 1 分程度の長さだったため、聴く視点が曖昧になってしまった。比較聴取の時間に関しては、長過ぎない方がいいということが考えられる。

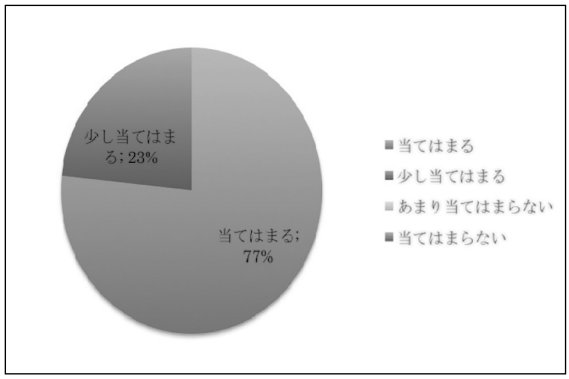
５．結果

検証授業を行った結果、２つの仮説において、次のような結果が得られた。まず、仮説（1）ねらいを明らかにするための比較聴取に関しては、授業後に行った振り返りシートを用い、「比較聴取によってねらいを意識することができた」という項目において、4 件法の分析を行った。その結果、全員が 4（当てはまる）、3（少し当てはまる）に回答した。そのうち、4 が 27 名（90%）、3 が 3 名（10%）だった［図表３］。



［図表３］

次に、仮説（2）演奏の変化に気付くための比較聴取に関しては、授業後に行った振り返りシートを用い、「前後の録音を聴いて変化していると思った」という項目において、4件法の分析を行った。その結果、全員が4（当てはまる）、3（少し当てはまる）に回答した。そのうち、4が23名（77%）、3が7名（23%）だった［図表４］。また、記述でも「最初に録音したのは、各パートで音がバラバラだったけど、最後は音程がそろって声も出るようになって良かったです。」や「最初に歌ったのと比べて、かなり声の出し方や音程が変わっていたのでびっくりしました。」と肯定的な意見がみられた。



［図表４］

振り返りシート

3年 3組 13番 氏名

今日のめあて
「（“なんとなく　　”）ではなく（“こうだ　”）で歌えるようになろう」

一番当てはまるところを○で囲んでください。

・パート練習では、めあてを意識して練習に取り組めた。
（ できた ・ 少しできた ・ あまりできなかった ・ できなかった ）

・今日の授業で、自分は“なんとなく”ではなく“こうだ”で歌えるようになった。
（ 歌えるようになった ・ 少し歌えるようになった ・ もう少し ・ もっと練習が必要そうだ ）

・最初の録音と最後の録音を聴き比べて合唱は変わったと思う。
（ 変わった ・ 少し変わった ・ あまり変わってない ・ 分からない ）

今日の授業の振り返り　今日の授業で、最初の時の歌は、バラバラで雑に歌ってるように聞こえました。でも、最後に聞いたのは、まとまってて意識しているなと思えるような歌になっていました。授業もわかりやすかったし、いい音色にもなったのでよかったです。

今後に向けて　今後は、授業で体験したことを生かして、どんどんうまくなっていきたいと思いました。なんとなく歌うのではなく、こうだ！と思えるようにしていきたいです。

［生徒のふりかえりシート１］

今日の授業の振り返り

最初に歌ったのと比べてかなり声の出し方や音程が変わっていたのでびっくりしました。耳より目を使って練習するということがいつもと違って楽しかったです。

［生徒のふりかえりシート２］

６．考察

結果を検証する授業実践を行った結果、本実践授業においては、二点の考察が得られた。一点目はねらいを明らかにする比較聴取は有効だったといえるということである。ただし、比較聴取だけではなく、答え合わせの際に用いた可視化の手立てである音程シートによる影響も大きかったと考えられるので、いずれが効果的であったかについては追跡調査が必要である。

二点目は演奏の変化に気付くための比較聴取は有効だったとことである。ただし、聴取する演奏の範囲が長すぎると、焦点がぶれてしまうため、比較聴取させる長さは検討する必要がある。

７．まとめと今後の展望

本実践研究では、比較聴取を取り入れた授業によって、生徒自身が演奏に変化に気付くことができるかを明らかにした。検証授業の結果、比較聴取はねらいを明らかにするうえでも､演奏の変化に気付くうえでも有効だったことが分かった。ただし、比較聴取を指導の手だてとしてより効果的に活用するという意味では、可視化シートの併用の可能性が考えられる。また、比較聴取の長さを適切に設定することも重要な要素であることが示唆された。

今回の研究では授業実践が一度のみで、仮説を十分に検証するためのデータが不足していた。そのため、来年度から現場に出て、引き続き実践と検証を続けていきたい。また、振り返りシートの書式が曖昧だったため、記述の分析が十分に行えなかったことも今後の課題である。そのため、来年度からは振り返りシートを改善して、実践を行っていきたい。

参考・引用文献一覧

ジェームス・マーセル（1971)『音楽的成長のための教育』,美田節子訳,音楽之友社.

衛藤晶子・小島律子(2006)「音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取-表現の授業の場合-」『大阪教育大学紀要』,pp.24-44.大阪教育大学

日吉武・山﨑浩隆（2012)「比較聴取による音楽鑑賞の授業構成：分析的な聴取から鑑賞への発展過程に着目して」『九州地区国立大学教育系・文系研究論文集』,（6）1.

山﨑浩隆(2014)「小学校低学年の音楽鑑賞学習における比較聴取に関する一考察」『熊本大学教育学部紀要』,pp.79-84.